災害時の情報手段

わたしたちはふだん，テレビやインターネットなどのメディアから様々な情報を得て生活に役立てています。しかし，大きな災害が起こると，ふだんどおりに情報を得ることができなくなります。緊急時に役立つメディアとは，どのようなものでしょうか。災害時に情報を得る手段について，考えてみましょう。

1 東日本大震災の発生直後に人々が求めた情報

東日本大震災が発生したのは，午後２時46分でした。まだ，職場や学校にいる人が多く，家族がばらばらになっていたので，「家族の無事を確かめたい。」というのが，人々の願いでした。

しかし，停電や電話をかける人が集中したことで，多くの電話がつながらなくなりました。このような状況の中，情報を得る手段となったのは，人から人への口伝えや張り紙などでした。家族の無事を確認するために，直接避難所を訪ね歩く人も数多くいました。

避難所の伝言板

2 避難生活と情報の入手

避難生活が始まると，「食料の調達」「給水」「電気の復旧」「交通」など，生活に必要な情報が手に入らないことがなやみとなりました。

電気が復旧せず，テレビやインターネットから情報を得ることが難しい地域が多い中，役立ったものの一つがラジオです。持ち運びが簡単にでき，電池があれば聞けるので，災害情報を入手しやすかったからです。

また，携帯電話への充電ができるようになると，インターネットを活用して個人が情報を発信し，みんなで共有する仕組み（SNS　フェイスブックなどのソーシャルネットワーキングサービス）を利用する人が増えました。

（株）ウェザーニュース提供

◆災害用伝言ダイヤル（171）

災害時には，たくさんの人たちが電話を利用するために，電話がつながりにくくなります。

そのようなとき，家族の安全を確認するには，災害用伝言ダイヤルが便利です。「171」をダイヤルし，音声ガイダンスにしたがって伝言の録音，再生を行います。

毎月の１日，15日など，体験利用できる日がありますので，家族で確認してみるのもよいでしょう。

? 考えよう

○災害発生からの期間や住んでいる場所によって，必要な情報にはちがいがあります。どんなときに，どんな手段で情報を得るとよいのか，震災のときの様子を家族や地域の人に聞いて調べてみましょう。

伝え続けるということ

河北新報社編集局長（当時）　太田　厳

東日本大震災のときには，電気や通信が止まり，わたしたちは，いつものように新聞を出せるのだろうか，という大変な状況になりました。しかし，「この大災害を伝えなければならない。情報を待っている人たちが大勢いる！」という新聞社みんなの強い思いで困難を乗り切り，翌12日朝の新聞を作って，家庭や避難所に届けることができました。

読者の方から，「震災翌日の朝，いつものようにポストに新聞が入る音を聞いて，こんなときにまさかと思いながら，救われた気がしました。」という手紙をいただきました。新聞を途切れることなく出し続け，伝えることの大切さを，あらためて心に刻む出来事でした。

多くの方が亡くなり，行方不明の方も数多くいます。悲しんだり，困ったりしている人たちは，それ以上です。震災は，まだまだ続いていると言えるでしょう。わたしたちは，大切な情報を伝え続けていきます。それは，復興へ向けて，前へ，と進むためにです。